論文の内容の要旨

氏名：山下　洪文
博士の専攻分野の名称：博士（芸術学）
論文題名：よみがえる荒地――戦後詩・歴史の彼方・美の終局――

本論文は、戦後詩を領導した荒地派を考究し、その詩意識を解明し、詩史のなかに新たに位置づけようとするものである。

荒地派の初期同人は、鮎川信夫・北村太郎・木原孝一・黒田三郎・田村隆一・中桐雅夫・三好豊一郎である。これに『荒地詩集　1954』からの同人であり、「荒地」のなかに在りながらその終焉を告知した詩人・吉本隆明を加えた八名を考究する。

自身の肉体に刻まれた戦争の傷口を、ひたすらに見つめるところから荒地派は出立した。主体・歴史・抒情……さまざまな根源的問題を、彼らは痛みとともに考察し、歌いつづけた。その営為を辿り、彼らの詩的主体の在り方を確認すること。彼らが求めたそれぞれの「荒地」を、指し示すこと。戦後詩に決定的影響をあたえた荒地派の総体を、明らかにすること。それが本論文の目的である。

その方法は、つぎのとおりである。

一．荒地派の戦争体験を研究し、それが詩的感性にどう影響したかを探る。
二．詩人の生涯を辿り、その変遷を立体的に再現する。
三．荒地派の言語を解剖し、その詩意識の推移を辿る。

これを用いて、全八章の論文を執筆した。順に説明する。

〔第一章　言葉の白装束――鮎川信夫論〕

戦後を代表する詩人であり、現代詩の展開を決定づけた評論家でもある鮎川信夫を考究した。鮎川の親友・森川義信は、「死んだ男」等に「M」として登場する。無惨な死を遂げた友への想いを、戦争体験の考察とともに描いた諸篇は、戦後詩の出発点を刻した。

「落葉」「橋上の人」等を考究し、鮎川の戦争体験の意義を明らかにした。また「淋しき二重」「冬物語」、それに数々の自伝的文章をもとに、鮎川が幼時から抱え込んだ「空白」が、「死者」に変容する過程を明らかにした。

「兵士の歌」は、戦争体験の決算とも言うべき詩篇である。これ以降、戦争を総合的に表現する作品は途絶する。代わりに、古典的な詩語に乗せて、生涯を振り返る詩が出現する。そこには、「死者」への消えがたい想いと、彼らに別れを告げたいという切実な願望が刻まれていた。この矛盾した志向は、「自然」を表現することで解消されていった。

鮎川が辿りついた場所は、「海の変化」に刻印されている。謎めいた言葉を、初期詩篇を参照しつつ読み解き、この情景が戦争体験により生み出された、荒地派の共有財産だったことを明らかにした。

〔第二章　死せるものたちの瞳――北村太郎論〕

北村太郎の生涯は、戦争の傷痕と、幼い日に彼を襲った「自然」への恐怖によって決定づけられた。

「墓地の人」「Pride and Prejudice――またはやさしい人」「地の人――失業者の独唱・一九五一年」は、独特の繋がりを持った三部作と考えることができる。すなわち北村は、「やさしい人」で戦後のヒューマニズムを否定し、「地の人」で否定への情熱を否定し、「墓地の人」で、両者の根底に漂う「死者」を発見しようとするのである。

「瓦解のまぼろし」（「寒露」）というフィルターをとおしてしか、北村は都市を見ることができなかった。だが、「自然」も「滅びのアラベスク」（同）を織りなしていることを悟り、彼は変わってゆく。詩人は「自然」を、「戦後」を許し、受け入れて生きる決意をする。本稿は、詩篇を年代順に辿り、詩人・北村太郎の本質を明らかにしたものである。

〔第三章　光と慟哭――木原孝一論〕

木原孝一は、「死」と「生」の境界を描きつづけた詩人である。「無名戦士」「彼方」「遠い国」等は、いずれも「生」と「死」の混融した領域を表現している。この傾向は、木原の戦争体験から帰結されたものだ。彼は一九四四年に技師として硫黄島に配属されるが、翌年、病のため本土に帰還している。米軍の上陸作戦が始まったのは、その直後だった。

木原の詩は、生の光と死の影の織りなすアラベスクである。望んだのではない生と、拒まれた死のあいだで焼け跡を彷徨ったとき、彼の詩法は宿命的に確立された。

大作「無名戦士（硫黄島）」は、二〇一七年、『血のいろの降る雪　木原孝一アンソロジー』（山下洪文編。未知谷）で初めて公開された。本稿は、初公開の原稿も参考としつつ、木原が目指した詩的領域を考究したものである。

〔第四章　神でもなく獣でもなく、人でもなく――黒田三郎論〕

「戦後詩人たちの中で最も幅広い読者を持つ」（小海永二「黒田三郎氏を悼む」）とされる黒田三郎の詩的世界を、残された十二詩集すべてを考究することで明らかにした。

『ひとりの女に』で恋愛詩人、『小さなユリと』で生活詩人としての相貌を、黒田はあらわす。それと平行して、『失はれた墓碑銘』『時代の囚人』で歌われた空白の「力」は影を潜める。「ひとりの女」を、女とともに生きる「戦後」を選択することで、かつての詩風は失われたのだ。黒田の後の営為は、「家庭」への違和、「過去」への憧憬、そして「戦後」の受容によって特徴づけられる。

黒田は戦前に生れ、戦火のなかで青春を過ごし、その記憶を引きずったまま戦後に突入した。「戦争」と「戦後」のあいだで引き裂かれつつ、「戦争」にも「戦後」にも帰属しないエネルギーを、彼は描きつづけた。「神」の視点に収まったモダニズム詩人とも、「獣」のような力を讃える肉体文学派とも、「人」であることを重視する『櫂』等の後続世代とも、断絶したところに主体を据えた詩人の営為を、本稿は克明に辿ったものである。

〔第五章　帝国の秋――田村隆一論〕

処女詩集『四千の日と夜』から最後の『1999』までを検証し、戦後最大とも称される詩人・田村隆一の全貌を明らかにした。

代表作「腐刻画」「秋」「立棺」等を分析し、『四千の日と夜』を詩史のなかに新たに位置づけた。そこに表現されていたのは、「戦後」への絶望と、新たな「歴史」への意志だった。

「戦争」を象徴的に再現するところから、田村は歩み始めた。だから「戦争」が忘却されるにつれ、その想像力は鈍化していった。この危機を乗り越えるために、詩人が見出したのは「自然」（「緑」）だった。「緑」は、「記憶と欲望」（エリオット「荒地」）を、主体と客体を、死と生を混濁させた表象である。

田村は、滅びの幻影に悩まされつづけた。だが滅びは、始まりの予兆でもあった。すべてが終わったとき、不可避的に始まりがおとずれるからだ。「戦争」から「自然」へ、彼の詩的主題は移っていったが、トラウマが消滅することはなかった。田村の詩を読む人は、前期と後期の落差に驚かされることが多い。だが、そこには確かに、荒地派としての一貫性があった。本稿はそのことを明らかにしたのである。

〔第六章　十三月の詩――中桐雅夫論〕

詩誌『ＬＵＮＡ』の創刊者であり、「荒地」の最初の仕掛け人であり、翻訳家としても優れた業績を残した中桐雅夫を、「死者との邂逅」というテーマを主軸に読みほどいた。

荒地派は、「死者」との対話を詩的営為の始まりに据えた。中桐は「荒地」のなかにありながら、それと真逆の軌跡を描いていた。鮎川信夫・木原孝一らが、詩的情緒の核に不可避的に「死者」を抱え込まされたのに対し、中桐は「死者」を持ちえなかった。このことは、戦後の彼の歩みに、遅滞と屈折をもたらさずにおかなかった。

死者への憧憬と融合は、後期の二詩集（『夢に夢みて』『会社の人事』）において、「現在」への批判精神に変貌する。本稿は、戦後詩人・中桐雅夫の軌跡をたんねんに辿り、その全貌を描いたものである。

〔第七章　壁の中の人――三好豊一郎論〕

三好の詩的遍歴は、グロテスクなまでに豊穣な自然と、戦争がもたらした存在の傷を描く前期（『囚人』『小さな証し』『黙示』）、世界への違和の解消が導かれる中期（『Spellbound』『林中感懐』）、自己存在の儚さと、身近な自然との交感を歌う後期（『夏の淵』『寒蟬集』）に分けられる。そのいずれにも、二つの「私」があらわれる。それぞれの時期に、両者はどう表現されたのか、そしていかなる帰趨を辿ったのかを見ることで、三好豊一郎の全貌を浮かび上がらせた。

〔第八章　透明な嵐のなかで――吉本隆明論〕

戦中詩篇から『記号の森の伝説歌』『言葉からの触手』までの営為を克明に辿り、詩人・吉本隆明の全貌を明らかにした。

『固有時との対話』は「記憶」、『転位のための十篇』は「忘却」を主題としている。そして「日没」「恋唄」等は、「転位」の後に得られた主体の在り方を明示している。それらを考究し、吉本にとっての「戦争」「戦後」の意味を明らかにした。

「未来」に繋がるための手段として、吉本は「神話」を構想する。「島はみんな幻」から「掌の旅（異稿）」までの諸篇を考究し、「記憶」から「神話」への道すじを辿った。『記号の森の伝説歌』は、「文字」の誕生を、吉本の生涯を媒介として描いた詩篇である。

「島はみんな幻」以降、吉本の詩に一人称が激減する。「神話」の代償のように、「わたし」という白熱した主体は消滅してしまったのだ。

ところが最後に、一人称が再帰する。「十七歳」「わたしの本はすぐに終る」がそれである。

「十七歳」の少年は、吉本であり、「昭和」でもある。詩的営為の終わり近くになって、「昭和」の、戦争の、青春の記憶が再帰する。そして、「言葉がとめどなく溢れた」。敗戦トラウマは、吉本を終生苛んだ。傷がなければ、「血」が流れることもない。苦悩があったからこそ、「言葉」は溢れたのだ。

吉本は、「戦争」「戦後」に拮抗しうる主体を描き、そこから壮大な思想を展開していった。原点にあったのは、あの世界観が崩壊した後の「荒地」だった。

破滅的体験が「美」に昇華しうることを、荒地派こそは証明した。残骸のなかに「生」のヒントがあることを、彼らの詩はいまでも教えているのである。